

じゅうじ がたようけん

ふじさかじんじゃ

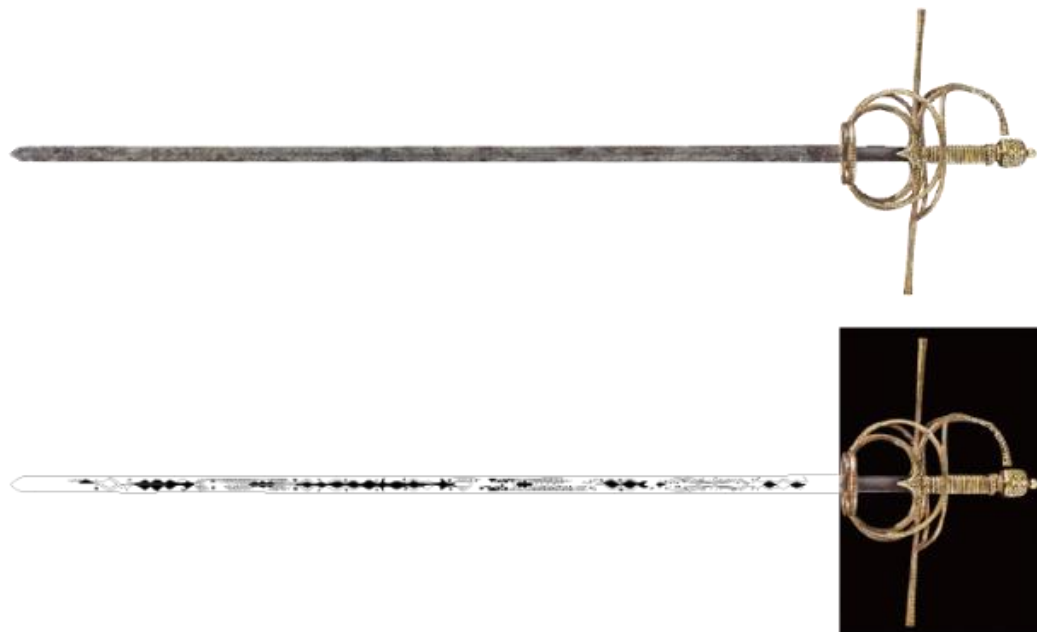
十字形洋剣 — 水口レイピア — 藤栄神社蔵 市指定有形文化財

●概要

藤栄神社の社宝として伝わる十字形洋剣、通称「水口レイピア」は、神社の創建時である文政 13(1830)年に水口藩主^{かとうあきくに}加藤明邦によって奉納されたと伝わっています。近年の調査によって^{つか}柄部と^{さや}鞘は 17 世紀前半に日本国内で作られたものであることが分かってきました。鞘は漆塗りで、^{こじり}鐙様金具の文様は柄部と同じです。刃部には浅い毛彫りで幾何学的な模様が施されています。

水口レイピア寸法

総長	104.5cm
刃部長	76.2cm
刃部幅	1.4～1.7cm
鐙相当部	5.8×9.0cm
柄部長	16.8cm
棒鐙横位幅	26.1cm
鞘部長	87.0cm
鞘部幅	2.2～2.4cm
鐙様金具長	9.6cm
総重量	約 890g
鞘なし重量	約 780g
鞘重量	約 110g



水口レイピアと刃部文様描き起こし図(末次由紀恵氏作図)

●レイピアについて



17 世紀のレイピア
※メトロポリタン美術館
HP 内画像より転載

レイピアは 15 世紀から 17 世紀のヨーロッパに登場する長剣です。その構造は主に柄、剣身、鞘の部分に分けられます。剣を握る手を保護するために複雑な籠状の柄が付けられ、柄の持ち手と鐙の間にある剣身の根元部分は剣を持つ際に指が傷つかないように全ての面が鈍く仕上げられています。

レイピアは短剣^{へいよう}を併用した刺突^{しとつ}用の武器であり、相手の剣を短剣で受け止めてレイピアで突くという攻撃方法を取ります。決闘^{けつとう}や護身^{ごしんよう}用の武器としてこの時代に広く用いられました。

また、レイピアは持ち歩く人の身分や地位を示すものでもありました。柄や鞘に様々な技巧を凝らした豪華なレイピアが作られ、贈答品としても利用されました。

水口レイピアのモデルとなった剣がいつどのように日本にもたらされたのかは分かりませんが、ヨーロッパ人を介して日本に渡ったのではないかと考えられます。

●水口レイピアと藤栄神社

藤栄神社は^{しずがたけしちほんやり}賤ヶ岳七本槍の一人、水口藩の藩祖^{かとうよしあき}加藤嘉明を祀っています。藤栄神社は文政 13(1830)年に藩祖嘉明を祭神として水口城内に創建されました。神社に伝わる 4 通の宗源宣旨によれば、文政 12(1829)年に「^{れいごう}霊号」として「^{かめいれいじん}嘉明霊神」が授与されましたが、その後、「^{かめいれいじん}嘉明霊神」を「^{かめいれいしゃ}嘉明霊社」あるいは



加藤嘉明肖像画
(藤栄神社蔵)

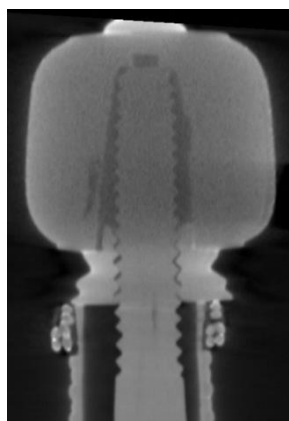


水口レイピア(鞘付き)

「明神」と称すべき旨が通達され、さらに「嘉明明神」を「大明神」とすべきであることが通達されました。これらの文書から、明治 4(1871)年以前には藤栄神社は「嘉明霊社」もしくは「嘉明大明神」と呼ばれていた事がわかります。

十字形洋剣は嘉明ゆかりの品とともに奉納され、藤栄神社の社宝として現在まで伝えられてきたのです。

●柄と剣身の接続方法について



柄部 CT 画像

(画像提供: 京都国立博物館)

水口レイピアは剣身と柄の接続のためにねじ構造が使われています。^{つかがしら}柄頭に雌ねじ、剣身の^{なかご}茎に雄ねじが切られており、ねじで剣身と柄を接続します。ヨーロッパ製の剣においてもねじ構造を持つものは確認されています。レイピアの一般的な柄の固定方法は剣身を柄に差し込み、柄頭の上に突き出た茎の先端を叩き、それが柄頭の摘みの上にぴったりと広がり平らになるまで潰す方法ですが、他の方法も用いられたことから、ねじで接続する方法は、メンテナンスや修理のしやすさを重視した際に好まれたと思われます。

●水口レイピアの持ち方と帯刀^{たいとう}

水口レイピアのような柄の形状を持つレイピアは人差し指を剣身の根元部分に巻き付け、親指をその反対側の縁に押し付けるような形で持ちます。また帯刀については、水口レイピアの鞘に^{くりかた}栗形をはめた痕跡が残っているので、栗形に^{さげお}下緒を通し、その下緒を腰帯に絡ませて帯刀したと考えられます。このことから、水口レイピアはヨーロッパ式ではなく、日本刀と同じように帯刀されていたのではないかと想定しています。



水口レイピア持ち方



栗形の痕跡